

アパレル産業のビジネスモデルにおける IT 活用を主題とした学習手法

Learning Method on IT Utilization in Business Model of Apparel Industry

長嶋 啓太^{*1}, 仲林 清^{*1}

Keita Nagashima^{*1}, Kiyoshi Nakabayashi^{*1}

^{*1}千葉工業大学

^{*1}Chiba Institute of Technology

Email: s1532116un@s.chibakoudai.jp

あらまし：情報系学生を対象にアパレル産業のビジネスモデルにおける IT 活用を主題とする学習手法を開発した。題材は学習者の既有知識や経験に結びつくよう、身近な UNIQLO とした。主題に関するビデオの視聴やレポート提出、他者の書いたレポートを閲読する等の学習主題の理解を深化させる学習手法を使用した。学習主題の理解状況と学習手法の妥当性をレポートとアンケートより評価した。

キーワード：ビジネスモデル、アパレル産業、UNIQLO、情報と産業、自他レポートの共有

1. はじめに

近年、企業が IT を経営に活用する事例が増えている。企業が直面する課題や利益増大のポイントを現状の経営と照らし合わせ、IT を活用し、解決する能力が求められる。本研究では実際に企業が IT を活用した事例をあげ、学習者にビジネスモデルの観点から IT 活用の意義を学習させる。

2. 学習主題

題材はアパレル産業におけるビジネスモデルである製造小売業(以下 SPA : Specialty store retailer Private label Apparel) とし、UNIQLO を事例として取り上げた。公開情報や文献等の既成事実に基づき、以下の(1)~(3)の学習主題を設定した。

(1) 余剰在庫問題

近年、衣服の供給量が増加し続け 2017 年には約 14 億点の衣服が廃棄されている。アパレル業界は各業務工程を別の事業主によって構成している事が多く、企画する会社と販売する会社が違うため情報のやりとりが円滑に行えない。アパレル業界の構造的な問題であり、ニーズやトレンドの解析に必要なデータが無駄になっている。

(2) UNIQLO の SPA

SPA は UNIQLO のビジネスモデルである。SPA はすべての業務工程を自社で一貫して行う体制で、本部と売場が直結しているため迅速で正確な情報のやり取りが可能である。新鮮で正確なデータから売れる商品の開発、適正量の生産ができ、余剰在庫が出るのをおさえつつも、ビジネスとして継続した利益を上げることができる⁽¹⁾。

(3) SPA を支える IT

SPA で体制が整っているのに IT がないと本社の企画部で各売場からの膨大な情報を次シーズンに活かす事が出来ない。UNIQLO は国内外に多くの店舗や工場を持つ事から遠方多数との迅速なやり取りが必須である。SPA は IT でシステム化する事が前提であり、IT の大きな恩恵を受けているビジネスモデルである。

3. 学習手法

社会経験の少ない学生にとってビジネスに関する学習主題は漠然としたもので、単なる知識付与型の学習手法では学習効果が期待できない。そこで、抽象度が高く、正解が一意に定まらない学習に適応し、効果がある授業設計の枠組みを適用する⁽²⁾。この枠組みでは以下(a)~(c)の方針をとる。

(a) 学習者の既有知識の活用

UNIQLO を題材とする事が当てはまる。学習者にとって身近な事例を上げる事で経験や既有知識に結びつけ理解させる。

(b) 主題に関する真正な状況・文脈の提示

ビデオを視聴させる。ただし、内容は学習主題(1)のみを説明するもので、その後説明する学習主題(2)(3)の内容と結びつけて能動的に理解せねばならない。学習主題の関連性を含めて理解させる。

(c) 自他の考えを対比する機会の提供

他人の書いたレポートを読んでもらう。レポートは結論が同じでも、学習者により切り口や着眼点が異なり、内容が多様化する事が考えられる。自他の考えを比較し、学習主題の理解を深める。

4. 実験

対象者は千葉工業大学情報ネットワーク学科 3 年生 6 名で、授業形式でビデオ視聴と学習主題(2), (3)の説明後、第一回レポート課題を出す。数日後、全員分の解答をまとめた資料を配布し、読むように指示する。第二回レポート課題を出し、提出後、アンケートを行った。

使用したビデオはクローズアップ現代+「新品の服を焼却！売れ残り 14 億点の舞台裏」(約 20 分)で、TV 番組形式で学習主題(1)余剰在庫問題の現状を紹介し、原因や対策を深掘りしている。

また、第一回レポートは学習手法の方針 3 の「自他の考えを対比する機会の提供」を効果的にするために、学習者それぞれの着眼点や考えの違いによって解答が変わり、他の学習者の第二回レポートへの

刺激になるように設計されている。したがって「～の観点で」や「次の単語を使って説明せよ」などの解答的が絞られる問題の出し方はしていない。

5. 結果

提出されたレポートを「文章が論理的か」「切り口が良いものか」「事実との整合性」「学習主題の理解度」の観点で評価した。被験者 A~F の結果を表 1 に示す。

表 1 の第二回レポート結果より、評価 5 が 2 人、評価 4 が 2 人と、学習主題の理解はまずまず良好な結果であった。また、第一回では評価 5 はいなかったが、内容は各学習者の着眼点や切り口が多様で、前述した第一回レポートの出し方の狙いどおりの結果となっていた。

表 2, 表 3 にアンケート結果と自由記述例を示す。表 2 の質問 I が、5.67 と高い値となっており、表 3 の①でも「自分が見落としていた部分の内容が得られた」と、他人のレポートを参考にすることで学習主題の理解が深まったことがわかる。ただし、質問 II で「レポートを出すのが大変だった」が 5.33 で表 3 の②でも「短期間で 2 度もレポートを出すのは少し面倒」とレポート執筆は学生にとって負担がかかっていることがわかった。

質問 III のビデオの内容については 1.83 と低く、表 ③でも「よりイメージが湧き、講義内容が入ってきやすかった。」とビデオが適切に学習主題 1 を説明し、主題全体をつなぐ役割として機能していることがわかった。

しかし、質問 IV, V では「経験や知識は講義内容に結び付いたか」が 4.83 で、「UNIQLO を良く利用する」の 5.17 を下回り、SD も 1.46 で人によってばらつきのある回答結果となった。UNIQLO について客としての経験や知識はあるものの、それが学習主題に結び付いていない結果になった。

表 1 レポート結果(5 段階)

レポート	A	B	C	D	E	F
一回目	3	4	3	4	3	4
二回目	4	5	2	5	3	4

表 2 アンケート結果(7 段階)

質問	平均	SD
I. 他人の第一回レポートを見ることにより、理解が深まった	5.67	0.47
II. レポートを出すのは大変だった	5.33	0.47
III. ビデオは余分な情報が多く何が言いたいかわからなかった	1.83	0.69
IV. UNIQLO を良く利用する	5.17	1.34
V. UNIQLO を利用した経験やサービスに関する知識は講義の内容と結びついた	4.83	1.46

表 3 アンケート結果(自由記述例)

①他の人のレポートを見る事で、認識の違いや、着眼点だったり自分のものと比較する形で新たな考え方や、自分が見落としていた部分の内容が得られた。
②短期間で 2 度もレポートを出すのは少し面倒だと感じた
③実際にビデオを見る事で、よりイメージが湧き、講義内容が入ってきやすかった。
④ビデオ内ではグラフや図などを用いて問題点が明らかになっていたのわかりやすかった。また問題に対する現状の理解も深まった。

6. 考察

結果から 3 章で述べた学習手法の方針に沿って考察する。

(a) 学習者の既有知識の活用

表 2 の質問 III より、UNIQLO を題材とする事により効果に差がある事がわかった。学生は衣服を店頭で購入しても、UNIQLO の SPA と IT の関わり合いを直接実感する事はなく、経験や既有知識と学習主題が結びつかなかったと考えられる。題材選定が目的と整合しておらず、目標を十分に達成する事ができなかった。

(b) 主題に関する真正な状況・文脈の提示

表 2, 表 3 より、ビデオの使用は学習主題 1 の余剰在庫問題の理解向上に有効であった。主題に関するリアルな状況を映像的に提示したうえで、学習者に主題全体を理解してもらうのに適切なツールであったと考えられる。

(c) 自他の考えを対比する機会の提供

第一回のレポートでは観点が被験者によって異なり、レポートに関するアンケート結果より、自他の考えを比較する事で学習主題の理解を実感する学生が多いことから、学習主題の理解が深まった。したがって、方針(c)を達成できたといえる。

7. 今後の課題

表 1 の学習者 C のように、第二回レポートの評価が一回目を下回った学習者がおり、原因を調査するため更にレポートの分析が必要である。また、レポート執筆が不得手な学生や負担とを感じる学生の対策が今後の課題である。

参考文献

- (1) 月泉博, 月泉博:ユニクロ 世界一を掴む経営, 日本経済新聞出版社 (2015)
- (2) 仲林清:ビジネスモデルにおける IT の活用を主題とするビデオとオンラインレポートを活用した授業実践—コンビニエンスストアを題材に— 教育システム情報学会誌, Vol 34, No.2, pp. 131-143 (2017)